

俳句 de 美術館

投句募集と記念句会

◎投句募集期間.. 10月7日～11月3日「無料・一人3句まで」

◎入選句発表と記念句会.. 11月23日(木・祝) 10..00～

【大高翔メッセージ～句句自解と共に】



絵の前に立ち、あるいは絵の中に入り、感じたことを小さな言葉に。その日その時の自分でなければ感じられなかったものが、俳句というささやかな詩となり、あなたの内なる宝となる。絵と俳句に共通点があるならば、限られたサイズのなかで、とてつもなく自由だということだ。そのことを、この美術館に来るたびに気づかされる。

中川一政という画家に会わせてもらったような気持ちになるこの場所で、画家の魅力はそのまま絵の魅力として、わたしを強く惹きつけてやまない。

天向くも地向くも自在冬椿

翔

「冬椿」という花が、これまで思っていたものとは違った新鮮なイメージで、絵の中に存在する。「天」でも「地」でもいい、好きな方をそれぞれに好奇心いっぱいにのぞき込んでいる。天真爛漫な「自在」は、健やかな躍動感に満ちていた。

冬の日の山描かれて脈打てり

翔

中川一政の大作、駒ヶ岳の前でしばらく時を過ごした。いろいろな季節、いろいろな時間帯を山で過ごしたような、ひと時だった。その間ずっと、静かで力強く「脈打」っているものを感じていた。そのあたたかな生命力こそが、この絵の力なのだ。腑に落ちた瞬間、大きな幸福感に包まれた。

おおたか しょう 藍花俳句会副主宰・俳人協会幹事

1977年徳島県に生まれ、13歳より作句。エッセイや校歌作詞なども手がけ、作句指導に取り組む。

2000年より、海外での俳句ワークショップ活動を開始。同年、「徳島県阿波文化創造賞」受賞。

2016年 第四句集『帰帆』(2014年、角川書店)にて「第一回俳句大学大賞」受賞。

2012年から22年まで京都芸術大学(旧京造形芸術大学)非常勤講師。2023年からアメリカ在住。

何もかも散らかして発つ夏の旅

笑いあう春のオルガンひくように

決断す晩夏の窓を開け放つ

◆これまで美術館で生まれた俳句◆

松任中川一政記念美術館 美術館句会

大高翔選

〔令和2年〕

一政の孤高緋色の冬薔薇

恵

「一政」に芸術家の「孤高」を感じ取った。「緋色の冬薔薇」は、画家の内面世界を象徴し、深い奥行きを感じさせる。

マジヨリカの騎士の眼差し冬銀河

和典

「マジヨリカ」の壺に目をこらし、「騎士の眼差し」を捉えた点がすばらしい。こまやかな観察から、スケールの大きな「冬銀河」へと着地して、余韻のある一句となった。

ふり返りふり返り去る薔薇の部屋

茂樹

「ふり返りふり返り」の繰り返しかから、「去る」名残惜しさが伝わってくる。「薔薇の部屋」で過ごした豊かな時間を、読者の想像させる句だ。

こわがらず描いてごらんと薔薇が言う 和子

「こわがらず描いてごらん」というメッセージを受け取った作者。中川一政という画家の人間性が、描いた「薔薇」から伝わってくるのだろう。

〔令和3年〕

花びらに黒い輪郭冬薔薇

文葉

「黒い輪郭」に作者の観察眼が光っている。細部をしっかりと描写することで、厳しい季節に咲く「冬薔薇」の全体像が浮かび上がる。

薔薇を挿すマジヨリカ壺の不等形

稔

的確な写生力のある一句。一政にしか描けない「薔薇」と「マジヨリカ壺」の構図の妙が「不等形」によって、見事に表現されている。

極月ごくげつや額をはみでる駒ヶ岳

蒼石

絵画の前に立ったからこそその「駒ヶ岳」の臨場感が、「額をはみでる」の迫力で感じられる。「極月」の濁音の重なりも効果的で、響きからも力強さが伝わってくる句。